

出題分析		
試験時間 75分	配点 150点	大問数 3題
分量 (昨年比較) [減少 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 増加]		難易度変化 (昨年比較) [易化 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 難化]
概 評 —— 出題の特徴・特記事項		
<p>今年度も昨年度に引き続き、数式や値を答える問題と記号選択問題のみであり、論述や描図形式の問題は出題されなかった。また、昨年度出題されなかったグラフの選択問題が、1題のみ出題された。大問ⅠとⅡでは、前半で平易な設定で基本的な事項を問い、後半から設定がやや複雑になり、よく考えて答える必要が出てくる。全体を通じて、易しく簡単に解答が導ける問題と、立式してやや複雑な計算を課す問題がはっきりしている。そのため、簡単な問題を手早く正確に解くことが求められる。さらに、後半のやや複雑な問題に時間をかけ点数を伸ばしたい。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
Ⅰ	力学 加速度センサー 慣性力 力のつり合い 円運動	スマートフォンの加速度センサーの計測値を考察する問題であった。問題文の説明と(2)の結果から、(3)以降ではスマートフォンにはたらく重力以外の力 (F_x , F_y , F_z) に注目すればよいことがわかる。従って、座標軸の向きや作用・反作用の法則に注意しながら全ての力を見落としなく把握する必要がある。	やや難
Ⅱ	波動 ドップラー効果	波動の分野からドップラー効果の問題が出題された。式の導出から行っているため、原理を理解している受験生はスムーズに解くことができたと思われる。後半は、前半の設定に加え、風が吹いている状態を考えている。最後の問題で反射された音波は、追い風になっていることに注意が必要である。	標準
Ⅲ	電磁気 コンデンサー 交流回路	電磁気からコンデンサーを扱った問題で前半と後半で扱う内容に違いがあった。前半は、コンデンサーへの誘電体の挿入を扱い、後半は、交流回路に関する問題であった。[B] (1)は、両極間の面積最大のものを選ぶ。[B] (5)は、平均値ではなく瞬時値なのでコンデンサーの電力も考える。	標準

設問構成 (設問数・形式・内容)								
大問 番号	設問数 (枝問総数 ^{※1})	選択式 枝問数	記述式 枝問数	語句 (空所補充) (一問一答)	計算	論述	描図 ^{※2}	その他
I	10 問 (11)	2	9	0	11	0	0	
II	6 問 (14)	0	14	0	14	0	0	
III	12 問 (13)	3	10	3	10	0	0	

※1 「枝問総数」は各設問（小問）に含まれる枝問も個々に数えた場合の全設問（小問・枝問）の総数。
設問形式・設問内容別の設問数も、これと同様の方法で算出した。

※2 グラフ・図を含む。

合格のための学習法
<p>年度によって非常に難しい問題が出題されることもあるが、例年ほとんど基礎から標準レベルの問題で構成されている。今年度は描図問題や論述問題が出題されなかったが、教科書のグラフを確認するなどして対策を行っておきたい。基礎から標準のレベルが頻出であるため、日頃から基礎をしっかりと理解した上で、入試標準問題集などで演習を積むようにしてほしい。また、物理という科目の性質上、ひとたびミスをすると雪崩式にその後ろの問題を間違えることがある。ミスをしないためには、日頃の演習の取り組み方が重要となる。演習はただこなすだけではなく、本番を意識し、見直しやミスの多い箇所、分野などをチェックするようにしてほしい。</p>